ニューヨークの「イタリア統一運動」

――ガリバルディ支援をめぐるイタリア系亡命者の実践とその連鎖――

林　孝洋

【要約】 本稿では、ニューヨークで展開したガリバルディ支援運動を、「イタリア協会」の実地活動から検討した。「イタリア協会」代表アヴェッツァーナは、ニューヨークに自由への賛同の素地を感じ取り、ガリバルディへの寄付募集活動に、イタリア系以外の人々が参加することを目指していた。そのような背景のもと、「イタリア協会」は広報活動によって寄付活動を周知させることを目指した。さらに、同団体は文化興行の開催により寄付募集を展開させ、多民族亡命者団体「友愛委員会」との協働により、民族の垣根を超えた寄付展開も行った。加えて、ニューヨークでのガリバルディ支援がイタリア系以外の亡命者や現地の知識人からも賛同を得ていたことも立証し、リソルジメントのもつトランスナショナルな一面を示した。

史林　一〇二巻五号　二〇一九年九月

はじめに

リソルジメント史[1]は、イタリア王国成立直後から、政治や社会情勢の影響を受け、その時代ごとにイデオロギー闘争の舞台となった。したがって、そのイデオロギー的解釈が研究の中心に据えられ、リソルジメントを生きた人々の文化や歴史がなおざりにされてきた。そのため従来の研究は、「国史」研究や政治史研究の様相を呈している。しかし二十世紀末から、その伝統的な問題設定からの転換が目指されはじめた[2]。とりわけ、注目されているのは、トランスナショナル・ヒ

【図】ガリバルディへの寄付
―募集地および金額―

寄付募集地	寄付額（単位：リラ）
ニューヨーク	10,090.21
ニューオーリンズ	7,033.86
サンフランシスコ	5,425.80
アメリカ合衆国合計	22,549.87
イングランド（都市名不明）	19,983.35
ブエノスアイレス	9,597.49
リオ・デ・ジャネイロ	5,800.03
アレクサンドリア	4,573.60
ロシア（都市名不明）	1,747.57
ハバナ	1,554.10
フランス（都市名不明）	865.00
スイス（都市名不明）	268.00
コンスタンティノープル	16.80

ストリーの視座からリソルジメントを理解しようとする試みである。

もちろん、リソルジメントがイタリア半島内で完結する歴史ではなく、より広い歴史的文脈で把握する必要があるという指摘は、近年に現れたものではない。[3] それでもなお、二〇一四年にL・ライアルとO・ハンスは、リソルジメント研究を支配するナショナルな歴史認識を批判した上で、イタリア半島を越えた理念や人的結合の相互作用について考察する有用性を強調した。[4] このことに鑑みても、いまだリソルジメント研究においては、ナショナルな歴史認識が支配的であると認めざるを得ず、そのためイタリア半島外とのつながりの中で、リソルジメントを再評価する必要性は依然として高い。

トランスナショナル・ヒストリーの視点からリソルジメントをとらえなおすに際して、非常に有益な分析対象であるのは、一八六〇年五月六日から同年十月二十六日にかけて行われた、ガリバルディの南イタリア遠征である。当時、ガリバルディは、自由主義者として、イタリア半島を越えた名声を獲得していた。彼の名声は、以下の二つの出来事で確立する。一つ目は、一八三六年から四八年まで滞在した南アメリカで、フアン・マヌエル・デ・ロサス政権下のアルゼンチンと、フルクトゥオーソ・リヴェラ率いるウルグアイ政府との間の戦争、いわゆる「大戦争」に、ウルグアイ側で参戦し、イタリア軍団を率いて活躍したことである。二つ目は、一八四九年に起こった、ローマ共和国の防衛戦において、ジャニーコロの丘の戦いで、フランス軍に勝利したことである。こ

の二つの闘争における彼の活躍は、新聞を通じて多くの地域で報道され、彼の名声はイタリア半島を越えて広がった。加えて、彼を題材にした小説や伝記、ポートレートの流行により、英雄としての文化的イメージが醸成され、その名声をより強固なものにした。[5] このような背景の中、ガリバルディが遠征を行う際には、イタリア半島にとどまらず、彼に対する資金や物資を提供するための寄付募集活動が展開していく。以上のことから、ガリバルディに送られた寄付金を取りまとめていた、ミラノに本部をもつガリバルディ支援団体、「百万のマスケット銃のための基金 Il fondo per un milione di fucili」（以下「マスケット銃基金」）の会計史料から作成したものである。[6] この【図】から、環大西洋地域を中心に寄付金が集まっており、中でも、アメリカ合衆国からの寄付金が最も多額であることが一目瞭然である。そこで、本稿では、アメリカ合衆国で展開したガリバルディに対する寄付募集活動を分析の対象に据える。

以下では、アメリカ合衆国とリソルジメント期イタリア半島の関係史について、研究史を整理し、先行研究の問題点を明らかにする。十九世紀中葉のイタリア半島と合衆国の関係は、リソルジメント史においても合衆国史においても、主流のテーマではなかったにせよ、二十世紀前半にいくつかの著作がある。N・ガイやH・マッラーロが、両国の文化的・外交的かかわりを示すことで両国関係史に先鞭をつけた。[7]

両国の関係史の研究は、アメリカ例外主義修正の文脈で大きく発展する。二〇〇三年にイラク戦争が勃発し、時の大統領がその戦争を正当化するためのロジックとして、アメリカ例外主義を持ち出した。このようなアクチュアルな課題を、歴史学的な観点から克服するために、アメリカ合衆国が、他国とのかかわりの中で発展したということを明示し、例外主義を相対化する論考が多く発表された。[8]

その他国として、イタリア半島も研究対象になり、リソルジメントをめぐる合衆国知識人の議論が、世界を唱導する共和主義国家としてのナショナルアイデンティティ形成に影響を与えたことが示された。[9] リソルジメントとの比較から、ア

メリカ例外主義の相対化を目指すこのような研究とともに、リソルジメントのトランスナショナル性を示す研究史的潮流も存在する。

その潮流は、合衆国の知識人や外交官が示したリソルジメントに対する思想的共感・批判や外交関係、文化的かかわりについて議論を発展させ、リソルジメント期イタリア史と南北戦争期合衆国史との接合を図った。D・フィオレンティーノの著作は、両国の外交関係と思想史を整理し、一八四八年から一九〇一年までの長い期間で、両国関係史を位置付けたことから、この研究史の到達点として評価できる。フィオレンティーノは、外交官、知識人、亡命者、ジャーナリストといった人々の活動を思想面から分析した。かかる分析から、彼は十九世紀中葉の両国の関係が、「大西洋地域をまたいだ歴史的風土と理念の伝播、そして自由主義的なシステムと共和主義的な原理に基づき、近代化に向かって社会の未来を思索した人々によって促進された」と評価し、ナショナルな大義とトランスナショナルな連帯の共存を示唆した。[10]

さらにフィオレンティーノは、リソルジメント運動の最終局面であるガリバルディの遠征期と、南北戦争直前の時期との比較から、カトリックに対する戦いと奴隷制に対する戦いの結合を、自由や近代化の普遍的価値によるものとしてまとめ、ガリバルディの遠征に対する合衆国北部の人々の好感は、この構図の最たる例であると主張した。[11]

しかし、自由主義や共和主義といった思想に感化され、合衆国の人々がガリバルディを支援したという理解は、図式的すぎるきらいがあろう。思想が独り歩きしたのではなく、それを伝える媒介者が必要であった。すなわち、その媒介者こそ、十九世紀のイタリア半島の政治騒擾の結果、合衆国に移動していた亡命者であった。

ガリバルディの遠征期には、大西洋を越えた多くのイタリア系亡命者により、合衆国でガリバルディ支援活動が行われていた。彼らの主な活動は、支援団体の設立と寄付募集であり、合衆国から大量の寄付金が集まったことは実証されている。[12] しかし、これらの研究は、会計帳簿から合衆国の寄付総額を示し、思想的共感の強さを多額の寄付金額を用いて説明するにとどまっている。

また、亡命者研究において示唆的なのは、M・イザベッラの研究である。彼は、亡命を知識人の政治理論を昇華させた知的経験としてとらえ、亡命者の思想を彼らの著作や活動をもとに分析し、イタリア半島外の政治理論が、十九世紀前半のイタリア系亡命者に与えた重要性を示した[13]。一方で、知的経験として亡命を認識する場合、分析対象が出版や思想に収斂してしまう傾向にある。そのため、亡命者が亡命地で行った実際の活動については、存在を示す記述はあるもののほとんど分析されていない。

つまり、合衆国における亡命者の足取りを日常レベルまで掘り下げ、亡命者の日常的活動や、亡命地での人間関係に注目し、末端から合衆国での亡命者の活動をとらえなおすことで、知的経験としてのみ把握されてきた亡命行為を、亡命者の実践という面から補完することが可能であろう[14]。

合衆国の中でもニューヨークは、多くの亡命者と移民を受け入れた都市であった。詳しくは後述するが、ニューヨークには他国の亡命者を歓迎し、彼らの活動を受け入れる素地があった。そのため亡命者と市井の人々のかかわりが活発であり、合衆国におけるガリバルディ支援の中心地となった。以上のことから、この地は亡命者の実践を理解するに際して、非常に有意義である。

そこで、本稿では、イタリア系亡命者がニューヨークで展開した寄付募集活動の詳細を明らかにし、彼らが展開した実地活動のもつ効力とその重要性を示す。同時に、イタリア系亡命者と、現地の知識人やイタリア系以外の亡命者との交流関係にも着目し、イタリア系亡命者によって展開されたイタリアを支援する動きが、ニューヨークにおいて、イタリア系以外の人々からも支持を得ていたことを実証する。そのために、研究対象を、先述の「マスケット銃基金」と協同しながら、ニューヨークを拠点に寄付募集を行った団体、「イタリア協会 Società Italiana」（以下「イタリア協会」）の寄付募集活動に設定する。

使用する史料は、イタリア共和国マントヴァ国立文書館所蔵の未刊行史料、「ジュゼッペ・フィンツィ関連文書 Carte

Giuseppe Finzi（以下「ジュゼッペ・フィンツィ関連文書」）と当時合衆国で発刊されていた諸新聞である。このマントヴァ国立文書館の史料は、「マスケット銃基金」共同代表の一人ジュゼッペ・フィンツィの息子エルネストが、同文書館に寄贈したものである。史料内容の多くは、イタリア半島内からの寄付に関するものであるが、半島外からの寄付についての史料も収められており、そこには支援者からの手紙、寄付者芳名帳、会計帳簿が含まれている。特に合衆国からの寄付については、その他の国に比して多量の史料が保存されているため、「ジュゼッペ・フィンツィ関連文書」は、合衆国でのガリバルディ支援を理解するために有益である。本稿では、「ジュゼッペ・フィンツィ関連文書」の中から、「イタリア協会」代表ジュゼッペ・アヴェッツァーナが「マスケット銃基金」に宛てた報告書や、アヴェッツァーナが封入した新聞記事、そして会計帳簿を用いる。

加えて、後述のように「イタリア協会」は、寄付募集に新聞広告を多用していたため、合衆国諸新聞から支援団体の活動戦略・広報戦略を読み解く。また、マッラーロが一九五七年に刊行した史料、ナポリ国立文書館の未刊行史料も参照した。[15]

以下第一章では、南北戦争直前の合衆国において、イタリア半島の政治闘争に対する支援が展開した背景を整理する。次いで第二章で、「マスケット銃基金」と「イタリア協会」について概観したのち、彼らがニューヨークで寄付を集めた歴史的意義を示す。最後に第三章でニューヨークを舞台に、「イタリア協会」による寄付募集の実践とニューヨークでの人的関係に注目し、亡命者の日常レベルの活動を明らかにしたうえで、ガリバルディ支援の賛同者が、イタリア系にとどまらないことを実証する。

① リソルジメントがいつ始まり、いつ終わるのかという問題は、いまだ未解決である。というのも、リソルジメントのどの側面を強調するのかによって、多様な解釈の可能性があるからである。このような問題に留意しつつも、本稿では、ヨーロッパの新しい政治秩序が誕生した一八一五年から、未回収の土地をのこしながらも、国家としての枠組みが完成した一八六一年までをリソルジメントの期間として設定す

る。リソルジメントの時期をめぐる議論については、以下を参照。Gilles Pécout, *Il Lungo Risorgimento: La Nascita dell'Italia Contemporanea (1770-1922)*, Milano, 2011, pp. 3–27.

② リソルジメントの史学史については Alberto Mario Banti, *Il Risorgimento Italiano*, Bari, 2004, pp. 119–133 及び、藤澤房俊『「イタリア」誕生の物語』講談社、二〇一二年、二三一－二三四頁を参照。二十世紀末からリソルジメントの深層にある文化への注目が促され、それまで研究が希薄であったオペラや絵画といった狭義の文化や、リソルジメントを生きた人々の心性や考えが脚光を浴びた。このような文化史的リソルジメント研究は、現在、研究のメインストリームであろう。

③ P・ギショネによると、J・ゴドショとR・パーマーが有力な論客として知られる「環大西洋革命論」の文脈でリソルジメントを理解する研究手法が提唱されている。ポール・ギショネ、幸田礼雅訳『イタリアの統一』白水社、二〇一三年、八頁。

④ Oliver Janz and Lucy Riall, 'Special Issue: The Italian Risorgimento: Transnational Perspective: Introduction', *Modern Italy*, vol. 19, issue 1, 2014, pp. 1–4.

⑤ Lucy Riall, *Garibaldi Invention of Hero*, Connecticut, 2007, pp. 37–58, 75–97.

⑥ Archivio di Stato di Mantova (以下 ASMn), *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 1, 6, Registro di Cassa, cc. 1–31. 地図及び表の表記は、史料に準ずる。なお、都市名が不明の場合は、筆者がその旨を補記した。

⑦ Harry Nelson Gay, *Le Relazioni fra l'Italia e gli Stati Uniti 1847-1871*, Roma, 1907, Haward Rosario Marraro, *American Opinion on the Unification of Italy 1846-1861*, New York, 1932.

⑧ イアン・ティレル『トランスナショナル・ネーション　アメリカ合衆国の歴史』明石書店、二〇一〇年では、イラク戦争とアメリカ例外主義とのかかわりが明示され、例外主義修正がうたわれている。

⑨ Paola Gemme, *Domesticating Foreign Struggles: The Italian Risorgimento and Antebellum American Identity*, Athens, 2005 や Enrico Dal Lago, 'Guerra Civile Americana, il Risorgimento Italiano e i Nazionalismi Europei dell'Ottocento: Histoire Croisée e Histoire Comparée', *Giornale di Storia Costituzionale*, No. 22, 2011, pp. 143–161.

⑩ Daniele Fiorentino, *Gli Stati Uniti e il Risorgimento d'Italia 1848-1901*, Roma, 2013, pp. 7–21.

⑪ *Ibid*, pp. 144–145.

⑫ Marraro, *American Opinion*, Giuseppe Faustini, 'Unita d'Italia: gli Stati Uniti e un Garibaldino Americano', *Italica*, vol. 89, N. 2, 2012, pp. 202–218.

⑬ Maurizio Isabella, 'Exile and Nationalism: the Case of the Risorgimento', *European History Quarterly*, vol.36, issue 4, 2006, pp. 493–520. Maurizio Isabella, *Risorgimento in Exile: Italian Émigrés and the Liberal International in the Post-Napoleonic Era*, New York, 2009.

⑭ 田中きく代「アメリカ合衆国におけるフォーティーエイターズ研究の動向と展望」『関西学院史学』四十一号、二〇一四年、八四―八五頁。

⑮ Howard R. Marraro, 'Documenti Italiani e Americani sulla Spedizione Garibaldina in Scilie,' *Russegna Storica del Risorgimento*, anno XLIV, fascicolo I, 1957, pp. 12–58.

第一章　南北戦争前夜の合衆国とイタリア半島――一八四八年革命からガリバルディの遠征まで

第一節　大西洋を越えた思想――写し鏡としてのイタリア

一八四八年以降、合衆国政府や知識人は、絶えずヨーロッパの出来事を注視していた。ワシントン政府は、モンロー宣言に基づいた中立主義により、直接的な財政的・軍事的支援を差し控えてはいたが、中立主義はヨーロッパの出来事への無関心を意味しなかった。[①] これまでの研究で示されたように、四八年革命から合衆国政府は二十年間にわたり、中立を保ちながらも、自由主義・共和主義的理念を支持することと、商業の自由を尊重することを自国の権利として明確に打ち出していた。[②]

合衆国政府の姿勢が、ヨーロッパ革命の賛同者に対して友好的であったため、合衆国ではヨーロッパの出来事に対して、議論や活動を展開することが容易であった。モンサグラーティが指摘するように、「世界の見方が一七七六年の価値と特殊性に強く結びついた」合衆国の知識人は、四八年革命を独裁体制の打倒及び社会政策の導入という二点から精察していた。[③] 以下では、四八年以降のヨーロッパに関する合衆国の議論の中で、ガリバルディの遠征開始時までに合衆国の人々の間で展開したイタリアについての議論を整理し、合衆国の人々がイタリアを注視した意味を考察する。

まず、イタリア半島の問題は、商業的利益と強く結びついていた。ジェンミが指摘するように、イタリア独立の支持者の一部は商品をイタリア半島に卸す製造者や商人であった。[④] 共和主義・自由主義の拡大は、自由貿易の拡大を意味し、王政の打倒が自身の商業的利益の増加につながると考えた人々が、イタリア独立に向けた運動を支持した。また、戦争それ自体もビジネスとして成立していた。四八年に米墨戦争の終結を迎え、武器の在庫を大量に抱えていた人々は、イタリア半島にも需要を見出していた。[⑤]

実際、一八五〇年代のサルデーニャ王国による外国製品輸入に関する保護関税廃止を含む政策によって、一八五一年から一八五九年にかけて、合衆国からサルデーニャへの輸出額は約十倍に増加した。[6] 一八四六年から一八五三年まで合衆国で両シチリア王国大使を務めたマルトゥシェッリは、合衆国の人々がもつ商業主義的性格について、頻繁に本国に報告している。その中で、合衆国のエネルギーは利益を追求することに向けられていると述べていることからも、当時の合衆国における商業拡大主義の一端が見受けられる。[7]

商業的利益の関心に加え、思想的な共感を表明するものもいた。十九世紀は、運輸技術の発達により大西洋をまたいで人々の往来が起こった時代でもあった。それにともない思想も移動し、刑務所改革や選挙制度改革などに代表される、大西洋を挟んだ政治改革運動が繰り広げられた。[8] 四八年革命への注目には、このような大西洋をまたいだ「近代化」の影響があった。

合衆国知識人は、四八年革命を、合衆国の共和主義がヨーロッパへと伝播した結果起こった革命としてとらえたが、リソルジメントもその例に漏れなかった。合衆国知識人は、リソルジメントをアメリカ独立革命のレプリカと考え、世界を導く共和主義の旗手として合衆国を認識した。[9] 一方で、イタリア系知識人も、合衆国を分析すべき対象として見ていた。最新の研究によって、イタリアと合衆国の人々が相互に関心をもって、社会改革について議論を展開していたことが示されたように、イタリアの知識人にとっても、合衆国がかかわりのない遠隔地ではなく、自国の発展のために批評すべき対象であったことは明確である。[10] このような相互的関心が、合衆国でのイタリアに関する議論を発展させた。

続いて、カトリックの総本山がその中心に位置するイタリア半島での政治動向は、宗教的関心を集めた。その中でも、教皇がローマから避難した後、その地に共和主義者らが共和国を建設した一八四九年の出来事は合衆国で大きな話題となった。合衆国のプロテスタント勢力は、ローマ共和国成立をカトリックの不可逆の衰退とみなし、プロテスタンティズムの成功と出現の好機を見ていた。[11] また、カトリックの問題は、アイルランド系移民の増加により、排外的な運動ももたら

した。アイルランド系移民が、職を求めて都市部に移住し、合衆国で都市問題、労働問題が発生したことで、移民排斥運動が生じた[12]。さらに、時の教皇ピウス九世が、四八年革命の勃発を機に、就任当時に見せた自由主義的改革方針を一転し、反革命的姿勢をとったことにより、教皇の世俗支配を独裁として批判する動きが合衆国で巻き起こった。

以上のことから、イタリア半島の問題の大部分が、アメリカの思想や社会状況に密接に関係していたことが明らかになった。つまり合衆国の人々はイタリアの情勢を考えることにより、自国の課題を詳らかにし、それについて思索を深めることができた。まさしく、イタリアは合衆国の写し鏡として機能していた。このようなイタリア半島に対する注目や共感は、ジュゼッペ・ガリバルディの南イタリア遠征期に佳境を迎える。ガリバルディが遠征を開始した一八六〇年は、合衆国で奴隷制の問題を中心に合衆国の南北対立が激化し、その溝が埋められぬほど深くなっていた時期と一致する。

第二節　「自由の旗手」としてのジュゼッペ・ガリバルディ

本節では、ガリバルディの遠征期に焦点を絞り、彼の動きが合衆国でいかに評価されていたのかを明らかにする。具体的にはガリバルディが遠征によって打倒しようとした教皇国家と両シチリア王国、及びガリバルディに対して合衆国の人々が抱いたイメージを探る。それにより、合衆国においてガリバルディに対する寄付募集活動が展開した背景を整理する。

合衆国でのガリバルディ支援は、北部自由州の諸都市で展開した。例えば、一八六〇年二月十七日に、ニューヨークのシティ・アセンブリー・ホールで、アメリカ市民による集会が行われた。そこでは多くの知識人が演説し、イタリアの独立が近いこと、それを応援すべきことが主張された[13]。また、一八六〇年七月二十八日土曜日に、ニューイングランドのニューポートにあるアクイドネック・ホールで開かれた別の会合では、名だたる愛国者が、合衆国市民としてガリバルディに武器と物資を与える旨の決議がなされた[14]。

合衆国北部都市において、ガリバルディ支援は、合衆国内部の政治情勢と結びつけられて語られた。フィオレンティーノが指摘するように、ガリバルディの反教権主義的性質の運動と、南北戦争間際の北部自由都市が掲げた反奴隷制運動が、大きな自由主義の流れの中で、共に進行したのは明白である[15]。先述の通り、合衆国の反カトリック主義は、一部では合衆国北部都市におけるアイルランド移民の増加とそれに伴う軋轢と結びつき、排外主義運動を引き起こした[16]。しかしながら、教皇庁に関する議論の主要な論点は、独裁や圧政といったイメージをもつ教皇の世俗権力についてであった。

ピウス九世の即位時、合衆国は彼に対する称賛に沸いていた。というのも、一八二三年以降の教皇庁における超保守主義の時代を終わらせ、鉄道の敷設に代表される近代化政策に着手した新教皇は、イタリア統一を主導すると考えられていたからである[17]。しかし、サルデーニャ王国がオーストリア帝国に対して宣戦布告をした際、教皇が戦争への不参加を表明し、一八四八年革命以降、保守体制に舵を切ったことを契機に、教皇への失望と不満が合衆国においても噴出する[18]。

一八四九年のローマ共和国成立と、その瓦解の折の英雄的防衛により、称賛の対象がガリバルディやマッツィーニら民主派に移行すると、教皇の世俗支配から諸地域を解放することが合衆国北部での主要な議題になる[19]。この点について、『ニューヨーク・ヘラルド』紙に掲載された一八六〇年七月十六日の記事は、ガリバルディ支援と反教権主義とのつながりを端的に表している。

「イタリア支援と教皇へのペテロ基金[20]」と見出しが付けられたこの記事では、ガリバルディに対してすでに集まった多額の寄付金を合衆国市民と結びつけて語ったのち、ガリバルディ支援とカトリック勢力により展開された教皇への基金を比較しながら、両基金を「聖ガリバルディ率いる自由と聖ピウス率いる独裁」として対比して述べている[21]。

またクリーブランドで発行された新聞では、J・C・フレッチャーという人物が行った講演会について報じている。その「ガリバルディ、イタリアの希望」と題した講演会で、フレッチャーは「イタリアは長らく、酷く破壊され、卑しい独裁の手に落ちている。ガリバーがリリパットに縛り付けられたように。イタリア半島は破壊され、分割され、卑しい圧政

支配下にある。」と述べ、その支配が教皇によって行われていることに言及している。[22] これらの記事からわかるように、かつてイタリアナショナリズムの牽引者として期待されていた教皇は、「独裁」の象徴へと変容した。

教皇国家と並んで、両シチリア王国も「独裁」国家として語られていた。その独裁的イメージは、一八五〇年に行われたイギリスの政治家ウィリアム・グラッドストンによるナポリ視察により創られる。グラッドストンは視察から帰国すると、その報告書を政府に提出し、両シチリア王国の政治体制が、非人道的・非文明的であると痛烈に非難した。この報告書は大西洋を越え、合衆国の紙面において大々的に報じられ、大きな議論を巻き起こした。[23]

つまり、シチリア島に上陸して両シチリア王国を倒し、ローマ解放を目指して北上するガリバルディの遠征は、合衆国においてはイタリアの国家統一というナショナルな枠組みを越えて、独裁に対抗する自由主義の戦いとして評価されていたといえる。特に、「独裁の権化ローマ教皇に対抗する英雄ガリバルディ」という構図をとった記事は、合衆国の新聞で幾度となく報道され、このガリバルディ・イメージは合衆国の人々に浸透していった。[24] ガリバルディへ送られた支援者の手紙や合衆国新聞の記事において、「自由」や「解放」と結び付けられてガリバルディが語られるのにはこうした背景があった。

そして、大西洋の反対側で展開した旧体制に対する戦いは、合衆国北部都市において、奴隷制に対する戦いと結び付けられ、イタリア半島の統一と合衆国の分裂が対比されて描かれることになる。[25] つまり、共和主義者としてガリバルディは奴隷制に反対していたが、それにとどまらず、合衆国では独裁に対する戦いと奴隷制に対する闘争は、大西洋をまたいだ近代化への共通の理念をもった動きとしてとらえられていた。[26]

もちろん、合衆国においてガリバルディに対抗する動きも同時に起きたことは付言しておかなければならない。とりわけ合衆国のカトリック勢力は明確に対抗運動を展開し、教皇庁に対する寄付を集めた。しかしながら、そもそも合衆国のようなプロテスタントが優勢な国では思うように資金が集まらなかったことから、教皇庁への支援はうまくいかなかった。[27]

合衆国がガリバルディ支援一色ではなかったにせよ、イタリアのナショナルな枠組みを越えた、「圧政に対する自由の旗手ガリバルディ」という言説は大きな影響力をもっていた。次章では、「マスケット銃基金」と「イタリア協会」について概観した後、「イタリア協会」が寄付を集めたニューヨークという場のもつ歴史的重要性を示す。

① Daniele Fiorentino, 'La Politica Estera degli Stati Uniti e l'Unità d'Italia', in Daniele Fiorentino e Matteo Sanfilippo (a cura di), *Gli Stati Uniti e l'unità d'Italia*, Roma, 2004, pp. 46–50.

② Luigi Rosso, 'Garibaldi e gli Stereotipi Italiani negli Stati Uniti', in Stefania Bonnani (a cura di), *Garibaldi: Cultura e Ideali Atti del LXIII Congresso di Storia del Risorgimento Italiano*, Roma, 2008, pp. 461–469, Fiorentino, 'La Politica Estera' p. 47.

③ Giuseppe Monsagrati, 'Gli Intellettuali Americani e il Processo di Unificazione Italiana', in Daniele Fiorentino e Matteo Sanfilippo (a cura di), *Gli Stati Uniti e l'Unità d'Italia*, Roma, 2004, p. 18.

④ Gemme, *Domesticating Foreign Struggles*, p. 67.

⑤ *Ibid.*, pp. 68–69.

⑥ *Ibid.*, p. 67.

⑦ Imma Acione, 'Immagini dell'America nei Documenti Diplomatici Napoletani (1837–1860)', in Daniel Spikes (a cura di), *Stati Uniti a Napoli: Rapporti Consolari 1796-1996*, Napoli, 1996, p. 79.

⑧ ティレル『トランスナショナル・ネーション』、七二－七五頁。

⑨ 古代ローマの共和制を共和主義の原点とし、合衆国はローマの後継者に過ぎないという言説を否定するために、合衆国知識人は古代ローマの帝国としての側面を強調することで合衆国を正統な共和主義の引導者として位置付けた。詳しくは Gemme, *Domesticating Foreign Struggles* pp. 17-32.

⑩ Daniele Fiorentino, 'Non Proprio un Modello: gli Stati Uniti nel Movimento Risorgimentale Italiano', *Laboratoire Italien*, No. 19, 2017. http://journals.openedition.org/laboratoireitalien/1276; DOI: 10.4000/laboratoireitalien.1276（二〇一九年三月十一日閲覧）

⑪ Rosso, 'Garibaldi e gli Stereotipi', pp. 467–468

⑫ Fiorentino, *Gli Stati Uniti*, pp. 101–103.

⑬ Marraro, *American Opinion*, pp. 285–298.

⑭ *Ibid.*, pp. 285–298.

⑮ Fiorentino, *Gli Stati Uniti*, pp. 143–144.

⑯ *Ibid.*, pp. 101–103.

⑰ 松本佐保『バチカン近現代史　ローマ教皇たちの「近代」との格闘』、中公新書、二〇一三年、二〇－二六頁。

⑱ 同前書、二〇－二六頁。

⑲ Fiorentino, *Gli Stati Uniti*, pp. 127–128.

⑳ カトリックの信者が納める任意の基金。

㉑ *The New York Herald*, 'Aid for Italy and Peter's Pence for the Pope', Jul., 16, 1860.

㉒ *Cleveland Morning Leader*, 'Lecture by Rev. J.C. Fletcher', Dec., 28, 1860.

㉓ Marraro, *American Opinion*, pp. 101–119.

㉔ このような構図をとる記事は枚挙に暇がない。以下は一例である。*Cleveland Morning Leader*, 'Lecture by Rev. J.C. Fletcher', Dec., 28,

1860, *Cleveland Morning Leader*, 'Aid to Garibaldi', Sep. 5, 1860., *The New York Herald*, 'Aid for Italy and Peter's Pence for the Pope', Jul., 16, 1860., *The New York Herald*, 'German Demonstration in Aid of the Garibaldi Fund - Oration, Music and Gymnastic Exercises', Aug., 31, 1860.

㉕ Fiorentino, *Gli Stati Uniti*, pp. 144-145.

㉖ *Ibid.*, p. 143.

㉗ Matteo Sanfilippo, 'L'Unita d'Italia e la Chiesa Cattolica Statiunitense', in Daniele Fiorentino e Matteo Sanfilippo (a cura di), *Gli Stati Uniti e l'Unità d'Italia*, Roma, 2004, pp. 101-112.

第二章　ガリバルディの遠征における寄付募集活動の意義と「自由」の地ニューヨーク

第一節　「マスケット銃基金」と「イタリア協会」――ガリバルディの遠征への寄付による貢献

ニューヨークで行われた「イタリア協会」の活動は、イタリア半島で展開していた「マスケット銃基金」の動きを補完するものとして行われていた。すなわち、ミラノに本部をもつ「マスケット銃基金」は、ニューヨークの「イタリア協会」と協働し寄付を集めていた。そのため、本節で「マスケット銃基金」及び「イタリア協会」についてそれぞれ整理し、ガリバルディの遠征に対する寄付による支援の重要性を考察する。その後、次節で同団体がニューヨークで寄付を集めた意義を分析する。

まず、「マスケット銃基金」について概観する。フランスとプロンビエール密約を結び、一八五九年四月二十七日に、オーストリア帝国との間で開戦した第二次イタリア独立戦争は、当初ロンバルド＝ヴェネト王国からロマーニャ地方までを含む北イタリア諸地域の統一を目標としていた。しかし、第二次イタリア独立戦争の煽りが中部イタリアやボローニャにまで広がり、革命がイタリア半島諸地域で起こりだすと、その状況を危惧したフランスは、一転して、一八五九年七月十一日、ヴィッラフランカにおいてオーストリア帝国との講和を締結した。もとよりフランスのリソルジメント運動支援は、フランスの利害を損なわない範囲での支援であり、統一国家を最終的にフランスの影響下に置くことを目的としてい

た。[1] そのため、革命諸政府の連立が、フランスにとって障害になると判断されると講和が結ばれた。それによりヴェネト地方の統一は果たされなかったが、北部イタリアの統一はほぼ達成され、またイタリア中部諸地域の革命臨時政府は、住民投票を行い、サルデーニャ王国への併合を選んだ。

このヴィッラフランカの講和は、当初からイタリア共和主義者による非難を浴びていた。例えばマッツィーニは、ヴィッラフランカの講和について、オーストリア支配からフランス支配への単なる変換と非難した。[2] 第二次イタリア独立戦争で、義勇部隊であるアルプス猟兵隊を率いサルデーニャ王国将校として参戦したガリバルディも、フランスによる一方的な講和に批判的で、ヴィットーリオ・エマヌエーレ二世に闘争を継続し、隷属状態のヴェネツィアや他の諸地域を、武力で解放するように訴えた。[3]

以前からガリバルディは、イタリアを外国支配から解放するために、国民皆兵構想を抱いていた。ヴィッラフランカの講和後、ガリバルディは、今なお外国支配下にあるイタリア諸地域の解放を目指し、その構想を実現するためにイタリアの人々に訴えかけ、寄付を開始した。これが「マスケット銃基金」の始まりである。[4]

新聞での大々的な宣伝の後、ガリバルディは一八五九年九月二十九日に、自身の五千リラの寄付と、ジョルジョ・パッラヴィチーノによる後援のもと、「マスケット銃基金」を開始した。本部はミラノに置かれ、同時にボローニャとニューヨークにも委員会が設置された。

ガリバルディは、「マスケット銃基金」の代表を二名選出した。青年イタリアのメンバーで、第二次イタリア独立戦争時にアルプス猟兵隊にも参加したエンリコ・ベザーナと、同じく青年イタリアのメンバーであったジュゼッペ・フィンツィである。

次に、「イタリア協会」について概要を整理する。「イタリア協会」は、ニューヨークに存在した相互扶助団体、「ニューヨークのイタリア団結友愛協会 Società di Unione Fratellanza Italiana in New York」（以下「イタリア団結友愛協会」）

を母体とする臨時団体である。「イタリア団結友愛協会」によって発行された定款によると、この団体は、合衆国政府に対して法人申請を行い、一八五八年四月十七日に法人化した相互扶助団体で、その活動内容は、「メンバーとその家族が、疾病や事故、貧困に見舞われたとき、金銭の支給や、合衆国の慈善組織によって実行されているような、ほかの同等の方法によって、メンバー及びその家族の扶助を行うこと」であった。[5]

ガリバルディの遠征が現実味を帯びると、一八五九年十一月末に、「イタリア団結友愛協会」によって、ガリバルディの遠征を支援するために、臨時団体「イタリア協会」が設立された。このような経緯を経て、「イタリア協会」は、「マスケット銃基金」に協力し、ニューヨークで寄付募集を行うことになる。代表はジュゼッペ・アヴェッツァーナ、副代表はドメニコ・ミネッリが務めていた。さらにメンバーとして、彫刻家パトリツィオ・ピアッティ、ミケーレ・ナンニ、アキッレ・マーニ教授、G・B・サングイネッティ、G・ガンドルフ、R・アンカラーニが所属していた。[6]「イタリア協会」メンバーは、ブルックリン在住のマーニを除いて、全員ニューヨークのブロードウェイ周辺に居を構えていた。[7]概要の整理に加え、「イタリア協会」に集ったイタリア系亡命者の人的関係と、政治的立場を明らかにするために、メンバーの出身地と思想について詳察する。

「イタリア協会」メンバーの出身地を見てみると、イタリア北中部出身者と南部出身者のつながりが明確になる。メンバー全員の出身地について調査することは困難であるが、代表アヴェッツァーナが、トリノ県のキエーリ出身であるのに対し、[8]副代表ミネッリは、両シチリア王国の臣民であり、パレルモの生まれであった。[9]このような北中部出身者と南部出身者のつながりは、メンバー構成以外からも確認できる。例えば、一八五九年三月三十日の『ワシントン・ユニオン』紙の記事から、そのつながりを裏付けすることが可能である。同記事は、アヴェッツァーナによって発行され、ナポリ人亡命者に対する祝福を表明したものである。その中で、アヴェッツァーナは、ロンドンに亡命したナポリ人亡命者たちに対して、もし、彼らが亡命地にニューヨークを選択していたならば、大きな歓迎をしたと表明している。[10]さらに、詳細につ

いては後述するが、一八六〇年七月十一日に、「イタリア協会」主催で、ガリバルディに対する寄付金を募るためのコンサートが開催された。ここで注目すべきは、このコンサートの売り上げが、シチリア人亡命者フランチェスコ・チャッチョの手を介して、ガリバルディのもとに運ばれたという事実である。[11] 以上のことから、ニューヨークにおける「イタリア協会」の寄付募集活動において、イタリア北中部出身者とイタリア南部出身者の協働が確認できる。

次に、思想についてである。もちろん、イタリア半島で起こった民主派の分裂のように、イタリア統一に対する政治的立場をめぐって、「イタリア協会」内で意見の相違や対立が起こった可能性はある。しかし、「イタリア協会」が、一八五九年末に開かれた会合を経て設立され、役員も投票で選ばれた点、団体設立から寄付募集を終えるまで、アヴェッツァーナが、ガリバルディの義勇軍に参加するため、一八六〇年八月二十五日にニューヨークを去り、副代表ミネッリが実質的な代表者になることを除いて、メンバー構成が変わっていない点を考慮すると、分裂に至るような大きな思想対立は見られなかったといえよう。加えて、メンバーのうち、アヴェッツァーナ、アンカラーニ、マーニが、マッツィーニによって結成された「行動党 Partito d'Azione」のアメリカ支部を設立し、イタリア半島に対する政治活動を、ニューヨークで継続していたように、「イタリア協会」は共和主義的な性格をもち、マッツィーニ主義の思想が色濃い団体であった。[12]

さらに、ニューヨークの「イタリア協会」は、合衆国諸都市に存在していたイタリア協会の本部として機能していたと思われる。それは、先述のナポリ人亡命者への祝福を表明した新聞記事の下部から確認できる。そこでは、ワシントンやバルティモアのイタリア協会が「支部 section」として書かれているのに対し、ニューヨークの「イタリア協会」は、「本部 central section」と説明されている。[13] イタリア協会間の具体的な関係性については不明であるが、ニューヨークの「イタリア協会」が、その他の都市に存在したイタリア協会に対してイニシアチヴをもっていたと考えられる。

「マスケット銃基金」は結果として、ガリバルディのシチリア遠征開始までにイタリア半島内外から集まった寄付金で、一万二千丁の銃を購入するに至った。しかし、ガリバルディが遠征に出発する直前に、この一万二千丁の銃は、ピエモン

テ政府の命を受けたミラノ知事マッシモ・ダゼーリオによって差し押さえられてしまう。この措置はカヴールの指示によるものであった。[14] 立憲君主制を支持するカヴールは、南イタリアが共和主義者によって征服され、共和主義的影響が及ぶことを懸念していた。かろうじて旧式の武器を集めることはできたが、輜重の確保の必要性から、遠征中も「マスケット銃基金」の活動は継続され、さらなる寄付募集の拡大が求められた。

つまり、ガリバルディの遠征にとって、戦争の進行に伴い不足していく物資を補うための資金確保は、目下の課題であったといえるだろう。実際、「マスケット銃基金」代表ベザーナが、ニューヨークの「イタリア協会」代表アヴェッツァーナに送った手紙には、「イタリアにとって重要な地域［シチリア］の運命は、ガリバルディ将軍へ届けられる支援に大きく頼っている。[15]」と記されており、この手紙から、寄付を募集していた当事者の認識が窺える。

ガリバルディの南イタリア遠征成功の理由については、多くの研究者がガリバルディの軍事的手腕と義勇軍の熱意、そして両シチリア王国の内政不安や世界情勢の変化に求めている。[16] しかし、本稿で示したような、当事者の感じていた重要性とは対照的に、研究史の中で寄付、特にイタリア半島外からの寄付については、ほとんど言及されていない。言及されていたとしても場所や金額を示し、外国からの寄付が存在していたことを指摘するにとどまっている。

しかし、兵士として遠征に参加する直接的支援に比べ、資金や物資を提供する間接的支援は、行為者に身体的危害が降りかからず、年齢などの身体的な条件に関わらず参加でき、紛争地に赴く多額の経済的負担もないため、多くの人が参加できる支援の形であった。したがって、義勇軍研究に代表される直接的な軍事活動の研究蓄積に対し、寄付という視点を提示することでガリバルディ支援活動をより複合的に分析することが可能である。[17]

第二節　ニューヨークで寄付を集めるということ

十九世紀の初頭から、ヨーロッパから新大陸に向けての移動が活発化する。経済的要因で移動するイタリア半島の人々

の多くは、新たな生活の地として、南アメリカ諸国を選択したが[18]、十九世紀中葉には、ニューヨークに約一万人のイタリア系住人がいたことが推定されている[19]。加えて、十九世紀にイタリア半島で起こった諸革命のおりに移動を余儀なくされたイタリア系亡命者の多くも、ニューヨークを移動先として選択した。

イタリア系にとどまらず、十九世紀中葉のニューヨークには、多くのエスニックグループが存在しており、それぞれのグループが本国を援助するために政治活動を展開していた[20]。このような政治運動は、亡命者によって主導され、エスニックグループ内の政治意識を滋養した[21]。さらに、一八三〇年以降、亡命者によってヨーロッパから運ばれた自由主義的気運は、合衆国の世論に大きな影響を与えていた[22]。

重ねて、このような自由主義の価値は、異なるエスニックグループを互酬関係の中で連帯させた[23]。したがって、一八四八年革命の英雄がニューヨークに亡命した際には、民族の垣根を越え、ニューヨークの住民から熱烈な歓迎を受けた。

例えば、一八五一年に、ハンガリーの英雄コッシュートが訪米し、アメリカツアーを実施したことが例として挙げられる。そのツアーの際、ニューヨークにもコッシュートは訪れている。彼の来訪は各地でセンセーションを巻き起こし、特にニューヨークで熱狂的な歓待を受けた[24]。

「イタリア協会」代表アヴェッツァーナも、ローマ共和国崩壊後ニューヨークに亡命した際、寄港地で熱狂的な歓迎を受けた。同じくガリバルディも、一八五〇年にニューヨークに亡命することになるが、到着の際に歓待を受けている[25]。

ニューヨークに居を構えていたアヴェッツァーナは、自身が受けた歓迎の経験も含め、このようなニューヨークのもつ自由主義に対する賛同の素地を感じ取っていたため、一八五九年に開始するガリバルディ支援活動を、イタリア系以外の人々も巻き込むものにしようと考えていた。このことはニューヨークでの寄付募集開始時に、アヴェッツァーナがガリバルディに送った手紙からも窺える。そこにはアメリカのイタリア系住民に寄付を呼び掛けると同時に、「市民及び宗教の自由を気に掛ける高貴な人々」にも協力を求めると書かれている[26]。

実際に「マスケット銃基金」の会計帳簿を見ると、ニューヨークでのガリバルディ支援に、イタリア系以外の参加があったことが確認できる。イタリア半島外諸地域からの寄付に関して、「マスケット銃基金」は会計帳簿にその概要を記している。その書式は、単語の微妙な違いこそあれ形式的統一がなされており、「□□□（イタリア人亡命者の氏名／団体名）が、その地域のイタリア系住民から集めた。Offerte Raccolte dal □□□ fra gli Italiani colà residente...」という書式で記されている。しかし、ニューヨークとニューオーリンズに限っては、この書式に次のような違いがある。その書式は「□□□（イタリア人亡命者の名前／団体名）が、主としてその地域のイタリア系住民から集めた。Offerte Raccolte dal □□□ principalmente fra gli Italiani colà residente...」であり、「主として principalmente」という副詞が、校正記号を用いて朱字で帳簿作成者によって挿入されている。[27] この「主として principalmente」という副詞によって、大多数ではないが注記すべき数の非イタリア系寄付参加者がいたことが示唆されている。

イタリア系以外の参加は、会計帳簿以外からも確認できる。ヘンリー・ジョンソンという人物のもとから派遣された、「自由」の大義でもって「独裁」からイタリアを救おうとしたアメリカ市民や、「ドイツ人」として寄付を収集した団体などが例としてあげられる。[28] つまり、「イタリア協会」にとってニューヨークで寄付を集めることは、イタリア系・非イタリア系住民問わず、自由主義への貢献を促すことを意味した。

次章では、このような背景をもったニューヨークにおけるイタリア系亡命者団体「イタリア協会」の実地活動と、亡命地での人間関係に着目し、その効力と歴史的意義を考える。

① 藤澤房俊『マッツィーニの思想と行動』、太陽出版、二〇一一年、三〇九頁。
② 同前書、三一一頁。
③ Riall, *Garibaldi*, pp. 175-176.
④ *Ibid.*, pp. 176-180.
⑤ Società di Unione e Fratellanza Italiana in New York, *Costituzione della Società di Unione e Fratellanza Italiana in New York*, New York, 1863, p. 3.
⑥ Francesco Durante, *Italoamericana Storia e Letteratura degli Italiani negli Stati Uniti 1776-1880*, Milano, 2001, p. 230.

⑦ *The New York Herald*, 'The Million Muskets Subscriptions', Nov., 28, 1859.

⑧ Durante, *Italoamericana*, p. 274.

⑨ Archivio di Stato di Napoli (以下 ASN), Ministero degli Affari Esteri 1734–1875, busta 2415, Società Italiana.

⑩ *The Washington Union*, 'The Neapolitan Exiles', Mar., 30, 1859.

⑪ Marraro, 'Documenti Italiani', pp. 34–35.

⑫ Durante, *Italoamericana*, p. 230.

⑬ *The Washington Union*, 'The Neapolitan Exiles', Mar., 30, 1859. ニューヨーク以外の同名組織についてはイタリア協会と表記。

⑭ Riall, *Garibaldi*, p. 183.

⑮ Marraro, 'Documenti Italiani', p. 19.

⑯ Derek Beales e Eugenio F. Biagini, *Il Risorgimento e l'Unificazione dell'Italia*, Bologna, 2015, pp. 163–165. 藤澤房俊『ガリバルディ　イタリア建国の英雄』、中公新書、二〇一六年。

⑰ ガリバルディの遠征に参加した義勇兵の研究は、以下のものが代表的である。Marcella Pellegrino Sutcliffe, 'British Red Shirts: a History of the Garibaldi Volunteers (1860)', Nir Arielli and Bruce Collins (eds.), *Transnational Soldiers: Foreign Military Enlistment in the Modern Era*, London, 2013, pp. 202–218.

⑱ Corrado Bonifazi, *L'Italia delle Migrazioni*, Bologna, 2013, pp. 25–26.

⑲ Robert Ernst, *Immigrant Life in New York City 1825-1863*, New York, 1994, p. 188.

⑳ 詳しくは、Ernst, *Immigrant Life*, pp. 122–134 を参照。ここでは、ニューヨークにおいて様々な民族が展開した本国への寄付活動が包括的に整理されている。

㉑ Ernst, *Immigrant Life*, p. 123.

㉒ Daniele Fiorentino, 'Re-building the Nation-State: the American Civil War in a Transnational Perspective', *Hispania Nova*, 13, 2015, pp. 205–207.

㉓ Ernst, *Immigrant Life*, p. 123.

㉔ 山本明代『大西洋を越えるハンガリー王国の移民　アメリカにおけるネットワークと共同体の形成』、二〇一三年、彩流社、二〇九–二一二頁。

㉕ Monsagrati, 'Gli Intellettuali Americani', p. 27., Alessandro Trojani, *L'Oro di Garibaldi: la Spedizione del Mille nel Contesto Internazionale*, Firenze, 2008, pp. 56–59.

㉖ ASMn, *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 10, 22, Lettere di Vari Garibaldini, Giuseppe Avezzana, cc. 626–627.

㉗ ASMn, *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 11, 7, Lettera di Enrico Besana e di Giuseppe Finzi, cc. 1–109.

㉘ Marraro, 'Documenti Italiani', pp. 40–41, p. 47.

第三章　「イタリア協会」の実地活動とその展開

第一節　「イタリア協会」の日常的実践

本節では、「イタリア協会」がニューヨークで実施していた寄付募集活動のうち、日常的実践を明らかにする。アヴェッツァーナは自伝を書き残しているが、その中に彼がニューヨークでガリバルディ支援を行っていた時期の記述は存在しない。[①] 書き残していない理由については判然としないが、自伝の大部分が、英雄的な戦争に関する記述に割かれている点を考慮すると、自身の人生を書き残す際、寄付に関する部分を捨象したのだろう。実際、ガリバルディの遠征に関しての記述も、アヴェッツァーナが、ガリバルディの軍に加わるため、ニューヨークを後にし、遠征に加わる場面から始まる。アヴェッツァーナ自身が、ニューヨークでの寄付募集運動について書き残していないため、副次的な史料から「イタリア協会」の活動を再構築する必要がある。まず、「イタリア協会」は、主要な宣伝活動として、新聞メディアを巧みに利用し、ガリバルディへの寄付を周知させていた。一八六〇年当時の合衆国においては、大体どの新聞も二セントという手に取りやすい金額で販売されていた。この新聞の利用価値に「マスケット銃基金」と「イタリア協会」は気付いていた。

【表】　寄付者芳名帳　例

氏名	寄付額
Un Italiano	$10.00
Andrea Tam	$5.00
Jack Sanguietti	$2.50
Un Amico di Susini	$50.00
Pappalardo	$20.00
Biseo	$3.00
A. C. Alfisi	$10.00
Col. W. Depeyster	$1.00
R. H. Stoddart	$1.00
Alex Edgard	$1.00
J. Townsend	$1.00
N. N.	$0.50
A. P. Man	$5.00
N. N.	$1.00
Mrs. L. G.	$25.00
P. Perazzo	$4.00
Ysnaga del Valle e Co.	$50.00
J. M. Rijo	$10.00
合計	$200.00

一八六〇年四月十日にアヴェッツァーナは、「マスケット銃基金」代表ベザーナに新聞を用いた寄付の広報について報告している。[2] この報告に対するベザーナの返答には、新聞の影響力についての言及がある。ベザーナはガリバルディの遠征が成功するためには、寄付や物資提供による援助が重要であるとし、寄付の必要性を強調した後、「アメリカ合衆国の新聞で、このこと［ガリバルディへの寄付］について記事を発行していただくことを切に願います。イタリアの統一運動が［合衆国で］普及することは、我々が願う目的に役立つでしょう。」と記している。[3] では「イタリア協会」は、新聞メディアをどのように利用していたのであろうか。当時の合衆国新聞に記載されていた「イタリア協会」発行の記事をもとに、同団体の広報戦略を紐解く。

まず「イタリア協会」は、寄付募集状況を定期的に記事にしており、寄付提供者の名前と金額とともに、日々増加する支援者の情報を公表していた。前掲の【表】は「イタリア協会」によって新聞に掲載されていた寄付者芳名帳の一例である。[4]【表】の寄付者は、アヴェッツァーナが開いた会合の参加者であり、この芳名帳は、一八六〇年八月九日発行のイタリア語新聞『エーコ・ディ・イタリア』紙で記事となった。[5] 同記事には、寄付に対する感謝と寄付金がミラノ本部に確実に届く旨がつづられている。[6] 加えて、一八六〇年七月発行分の芳名帳に氏名の誤りがあったことを伝え、氏名を訂正していることから、[7] 少なくとも月に一度は芳名帳が更新されていたと考えられる。

さらに、「イタリア協会」は、英語新聞でも同様の報道を行っていた。アヴェッツァーナは一八六〇年四月三日の『ニューヨーク・ヘラルド』紙面で、イタリア独立に関心をもつ人々に対して、寄付者芳名帳の公開を約束している。[8] 寄付者芳名帳の公開により、「イタリア協会」はガリバルディ支援運動が合衆国で実際に展開していることを読者に伝えていた。

「イタリア協会」は、支援者の情報を知らせるという点を重視しており、寄付者芳名帳を様々な場所に委託して、各委託場所で寄付の受理ができる仕組みを整えていた。つまり、ホテルや新聞社のオフィス、協力者の自宅などに芳名帳を委託することで町中の様々な場所で芳名帳を公開し、市民の目に留まりやすく、また寄付を行いやすい環境を作り上げてい

たのである。実際、芳名帳を見て寄付を行った人物もおり、合衆国市民で、タバコの大商人でもあったジョン・アンダーソンは、芳名帳を委託されていた新聞社の編集長に送った手紙の中で、「ガリバルディ基金のために貴社のオフィスで公開している寄付者芳名帳を見て、千ドルの小切手を同封しました。それを受け取って、ガリバルディ基金に対する私からの貢献として受理してください。[9]」と記している。

一八五九年十一月二十九日の段階では、ニューヨーク・ヘラルド社とニューヨーク・タイムス社、ニューヨーク・トリビューン社のオフィス、アスターハウスホテル、ブロードウェイ一番通りのワシントンホテル、プリンスストリート五十五番地のアンドレス・カッサード氏、イタリア協会のメンバーのみが芳名帳を委託されていたが[10]、その委託者の数は、時間の経過とともに増加している[11]。さらに、詳しくは本章第三節で後述するが、ニューヨークにいた他民族亡命者も寄付者芳名帳を委託され、この寄付募集活動に多数参加することになる[12]。

もちろん、新聞メディアの利用を考える際には、識字率に留意しなければならない。イタリア系労働者の多くはファイブポインツのような貧民街に居住していた。彼らに識字能力があったとは考えにくい。しかしながら、「イタリア協会」は、基本的にブロードウェイとウォールストリートの二か所で寄付活動を展開していた。これらの場所は、商業的中心地及び新興高級住宅街である[13]。すなわち、「イタリア協会」は寄付者層として労働者層を見ていなかった。そのため、ここで識字率の問題は勘案しない。

「イタリア協会」の日常的な寄付募集戦略は、新聞が日刊である性質を利用し、寄付募集の進行を周知させ、寄付者芳名帳の公開と寄付募集の実行を様々な人に委託することで、広範囲において寄付を集めるというものであった。

第二節　文化興行による寄付展開

「イタリア協会」は日常的実践に加えて、寄付を募るために文化興行を催していた。本節では、まず「イタリア協会」

と「マスケット銃基金」との間で交わされた書簡史料を通時的に整理し、「イタリア協会」による文化興行が、どのような背景で開催されたのかを明らかにした後、文化興行のもつ寄付募集活動への影響を考える。

手始めに、ガリバルディの遠征を被っていた両シチリア王国の在ニューヨーク大使が、本国へ送った一八六〇年四月四日の報告を見る。それは、「イタリア協会」に関するもので、そこでは大使アンフォラが、「イタリア協会」を「すでに相当な金額が集まっている百万のマスケット銃の寄付のための同団体」として報告している。[14] 一方、「イタリア協会」が同年四月十日に「マスケット銃基金」へ送った報告では、ニューヨークでの寄付募集活動に関して、「すでに新聞にて寄付の継続を知らせています。これらの提供は全く足りていません」と評している。[15] ここから、該当時期において、寄付活動の成果は、両シチリア王国側にとって警戒すべきであっても、「イタリア協会」にとっては不足していたと判断できる。

続いて、同年五月十八日に、「マスケット銃基金」代表ベザーナからニューヨークでの寄付のさらなる展開を依頼されたアヴェッツァーナは、七月七日の返信で、寄付募集の「成果が非常に乏しいであろうことを残念に思います。」と口惜しい気持ちを表し、その後「すばやく他の金額を用立てられるようになることを望んでいます。」とさらなる寄付の発展を約束した。[16] この書簡からは「マスケット銃基金」が「イタリア協会」に要請した金額に比して、寄付の成果が芳しくないことが読み取れる。

つまり、敵国から見れば、「イタリア協会」による寄付募集の成果は警戒すべき域に達していたが、「マスケット銃基金」と「イタリア協会」はさらなる寄付展開の必要を感じていた。そのような中、「イタリア協会」はガリバルディへの寄付を募るため、オペラコンサートを開催する。

イタリア系オペラ歌手らが無報酬で行ったコンサートは、一八六〇年七月十一日にウォールストリートの音楽学院で開催された。そこではガリバルディを称賛する題目「ガリバルディ・ラタプラン」が演奏された。[17] このコンサートの利益は一八八二ドルで、そこから諸経費を差し引いた一三三四．一九ドルがアヴェッツァーナの手に渡り、シチリア人亡命者チ

ャッチョを介して、ガリバルディに届けられた[18]。このコンサートで最も高い席は、予約席の一・五ドルであったので、少なくとも千人以上が観覧したことになる。

この興行の入場料が、ガリバルディ支援に充てられることは広告で明示されていた[19]。そのため参加者は、これら興行の意図を認識していたであろう。オペラコンサートは大盛会で、多くの金額がガリバルディの手に渡った。つまりガリバルディを称賛する祝祭は、資金を集めるための効率的な手段であった。現在、祝祭についての研究動向は、祝祭空間をエリートと一般の人々を結びつけるチャネルとして把握する方向を向いている[20]。つまり、市井の人々を巻き込むものとして非日常の祝祭をとらえ、そこに人々と指導者を結びつけるコミュニケーションが生じるという考え方である[21]。

本稿の場合、祝祭の対象はガリバルディである。人々を熱狂させる求心力は申し分ない。ニューヨークでは、ガリバルディの伝記や彼をモチーフにした歴史小説がベストセラーとなり、連日新聞でガリバルディの人物像や南イタリア遠征が記事になるほど市民の関心を引いていたためである。

それは寄付金の額にも表れており、上述のオペラ大会が一日で集めた一八八二ドルという金額は、ガリバルディ支援団体が集めた寄付金としては、膨大であった。サンフランシスコのイタリア人協会が、合衆国の各主要都市から集めた寄付総額が一〇二〇ドルであったこと[22]、アヴェッツァーナが会合で集めた金額が、二〇〇ドル程度であったこと[23]に鑑みればその金額の膨大さが窺える。

オペラ大会に次いで、一八六〇年八月三十日、ニューヨークに存在した多民族亡命者団体との共催で、「イタリア協会」は、体操大会を開催した。先述の通り、この時点でアヴェッツァーナは、ガリバルディの義勇軍に参加するため、ニューヨークを後にしており、実質的代表は、前副代表ドメニコ・ミネッリである。この体操大会の様子は、翌日の紙面で報じられている[24]。この記事からは「イタリア協会」のいくつかの戦略が確認できる。一点目は、エントランスでガリバルディの肖像画が販売されている点であり、「イタリア協会」は、合衆国で英雄像が確立していたガリバルディの人気を利用し

ていたことが読み取れる。興行時の肖像画販売だけではなく、「イタリア協会」がイタリア系画家によって描かれたガリバルディの油絵をウォールストリートの商業取引所で展示していたことからも団体が絵画を積極的に利用していたことが窺える。[25] マッラーロによると、「イタリア協会」は、様々な画家に絵の作成を依頼しており、その販売利益をガリバルディ支援に充てていた。[26]

二点目は、ドイツ系亡命者と体操選手によるガリバルディを賛美した演説や詩の朗読について言及されている点である。この演説では、亡命者がガリバルディ支援への協力を呼びかけ、また体操選手ヒュッテルは圧政に関する詩を朗読している。

三点目は、演技の技術が非常に高く、観衆を惹きつけている点である。当然、多くの寄付を集めるためには、観客を熱狂させる必要がある。実際、上記の体操大会についての記事によると、体操選手は素晴らしい技術でもって観客を熱狂させ、その結果観客が深夜まで会場にとどまり、多くの資金を集めることに成功している。[27]

この体操大会の成功は、合衆国でドイツ系亡命者が体操を通じて、ドイツ独立のために、身体的なエクササイズの必要性を説いたターナー運動を継続していたことに一因がある。一八四八年にシンシナティで最初のターナークラブが設立されて以降、その数は増加の一途をたどり、一八五五年から一八六〇年の間には、合衆国での会員数が一万人を越えたとされる。[28] つまり、当時人気であったターナー運動をガリバルディ支援に結び付けることで、多くの資金を集めることが可能であった。

「イタリア協会」は、「マスケット銃基金」の要請に応えるため、オペラ興行や体操大会を開催し、市井の人々を巻き込んだ共有の祝祭空間を形成した。その中で、「イタリア協会」やイタリア系以外の亡命者は、演説やガリバルディを題材にしたオペラ、体操の演技などを通じて多くの人々に寄付を促した。

第三節　イタリア的活動からヨーロッパ的活動へ——多民族亡命者団体との連帯

本節では、在ニューヨークの多民族亡命者によって組織されていた団体、「諸国民友愛委員会 The Committee of the Fraternity of All Nations」（以下「友愛委員会」）と協力することで、「イタリア協会」がニューヨークでのガリバルディ支援運動を、イタリア系によるナショナルな活動の範疇を越えた活動に昇華させたことを示す。そのうえで、「友愛委員会」がガリバルディ支援に参加した動機を解明し、その展開がイタリア系の一方的な要求ではなく、互いに利益のあるものであったことを明らかにする。

「友愛委員会」は、グスタフ・スツルヴェが代表を務める亡命者団体であり、書記の役職には「イタリア協会」副代表のドメニコ・ミネッリが就いていた。同団体は、ニューヨーク、バワリー街、シュトゥーベン・ハウスに本部を設置していた。「友愛委員会」との協力関係が始まるのは、一八六〇年七月二十一日のことである。「友愛委員会」は、本部にて会合を開き、「複数の民族からなるグループが資金調達の委員会を正式に制定」した[29]。

まず、「イタリア協会」は、「友愛委員会」のメンバーに寄付者芳名帳を委託した。委託された亡命者は個々人でガリバルディへの寄付を宣伝したであろう。委託されたメンバーはG・スツルヴェ、W・コハノフスキ、E・ミネッリ、O・ホイファー、J・ヴォイラー、I・カップ、A・ロネーラ、W・ソベ、T・レウール、B・シュターマン、T・ヴィボー、T・グラウベネクリー、A・アルボス、A・ラツォウスキー、J・ヴィウドムラー、G・マショー、E・カップ、R・アネラーニである[30]。このうちスツルヴェとカップは、有名なドイツ系亡命者であり、四八年革命を契機に合衆国に亡命した人物である。スツルヴェやカップのように比較的有名な亡命者だけではなく、四八年革命の際に祖国を追われた亡命者は大勢いた。そして、ヨーロッパ諸革命の失敗は、政治亡命者を英雄として迎え入れる伝統をもつ合衆国に、多くの亡命者をもたらした[31]。ニューヨークのエスニック・マイノリティ内で、ドイツ系住民は、アイルランド系に次ぐ人口を有してい

たため、スツルヴェらに寄付募集の協力を要請し、ドイツ系住民をガリバルディ支援に巻き込むことは大きな影響力があった。[32]

先述の通り、亡命者の受け入れ先として機能していたニューヨークでは、頻繁に祖国に対する支援が行われていた。民族的な意識はスポーツクラブや体操協会と密接に結びつき、試合や体操大会を通じて、ニューヨークに住む各民族のナショナルな感情を盛り上げた。[33] 前節で述べた体操大会も、「友愛委員会」主催のもので、利益は「イタリア協会」へと渡された。重要なのは、このような民族的団体活動が、各々の民族が抱く、祖国への意識を盛り上げるのと同時に、共通の目的をもった他民族にも協力し、結託する意識を各々の民族に与えたということである。民族を越えた影響は、ニューヨークという限られた地域に多くの国から移民や亡命者が集まった点に起因する。

これまで述べたように、「イタリア協会」の寄付活動は、他民族亡命者を巻き込みながら展開した。この関係が双方にとってどのような意味をもつのかを考察することで、団体間の利害関係が浮き彫りになる。なぜ、「友愛委員会」は「イタリア協会」に協力をしたのであろうか。「イタリア協会」は、寄付を始める際の決議からも見て取れるように、イタリア系以外の人々が参画することを意図していた。[34] 実際、亡命者への寄付者芳名帳の委託や、体操大会のような亡命者による宣伝活動は大きな貢献であった。ここで重要なのは、「友愛委員会」にとって、ガリバルディを支援することが、どのような必要性や価値をもったのかという点である。以下では、「友愛委員会」がガリバルディを支援した理由と、それにより得られた利益を考える。

「友愛委員会」は、会合でガリバルディ支援に参加することを決議した後、ガリバルディに手紙を送った。そこではガリバルディを、イタリアのナショナル・ヒーローとしてではなく、「ヨーロッパの解放の伝道者」と評価している。[35] さらに、「友愛委員会」がオハイオ州クリーブランドにある体操協会に対して、ガリバルディ支援を求める手紙を送っており、その中にもガリバルディの評価が見て取れる。

この手紙では、教皇とガリバルディの対立構造の中に、自由主義的訴えを織り交ぜながら、クリーブランドの体操協会に、ガリバルディ支援への参加を呼び掛けている。加えて、圧政下のヨーロッパ諸国を支援する団体の設立を主張し、その第一歩として、ガリバルディ支援を挙げている[36]。この二つの手紙から、「友愛委員会」はガリバルディの南イタリア遠征の成功が、ヨーロッパの解放を刺激すると考えていたことが窺える。

「イタリア協会」と「友愛委員会」の協力関係には、互酬性があった。つまり、「イタリア協会」は、亡命者のつながりを利用して寄付の宣伝や募集を展開していたのに対し、「友愛委員会」は、ガリバルディの遠征の成功を起爆剤として、ヨーロッパ中に革命運動を広げ、祖国に影響を与えることを望んでいた。この利害関係が、亡命者団体との協力関係を築き、寄付を展開させる動機の一つであった。

実際、先述の体操大会でスツルヴェの演説を聞いた新聞記者は、翌日の記事に「スツルヴェ氏は演説で、自由の大義は全自由人の活発な団結と共感をひきつけるはずであると主張した。氏は、ヨーロッパ人が自身の権利と自由を維持するために、堅い意志をもつ時が来たと考えており、現在、闘争はイタリアに限定的であるが、最終的に闘争が全ヨーロッパに広がると予想していた[37]。」と記しており、この記事は「友愛委員会」代表スツルヴェのガリバルディ支援動機を端的に表している。

「イタリア協会」は、「友愛委員会」と協力することで、寄付活動に対する多民族の参加を見越していた。それに対し、「友愛委員会」はガリバルディ支援が広がることで、革命運動が祖国まで波及することを望んでいた。亡命者たちは、祖国に革命の火種を持ち込むために寄付活動に参加し、ガリバルディの動きを成功させなければならなかった。このような互酬性に基づいた利害関係が、亡命者との協力関係の背景にあった。ニューヨークの亡命者コミュニティーにおいて、ガリバルディ支援運動は、もはやイタリア的運動としてではなく、ヨーロッパ的な運動に変容していた。

① 以下のページにおいて、ガリバルディへの寄付募集運動に関する記載がないことが確認できる。Giuseppe Avezzana, *I Miei Ricordi*, Napoli, 1881, pp. 95–96.

② ASMn, *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 9, 13, Catania: Italiani all'Estero, Avezzana Giuseppe, cc. 500–513.

③ Marraro, 'Documenti Italiani', p. 19.

④ ASMn, *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 9, 13, Catania: Italiani all'Estero, Avezzana Giuseppe, cc. 500–513 より作成。

⑤ 『エーコ・ディ・イタリア』紙はこの時期に合衆国で発行されていた唯一のイタリア語新聞であり、自由主義革命家であるイタリア系亡命者セッキ・デ・カザーリにより創刊された。詳しくは Ernst, *Immigrant Life*, pp. 157–158.

⑥ ASMn, *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 9, 13, Catania: Italiani all'Estero, Avezzana Giuseppe, cc. 500–513.

⑦ ASMn, *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 9, 13, Catania: Italiani all'Estero, Avezzana Giuseppe, cc. 500–513.

⑧ *The New York Herald*, 'Aid for Italy', Apr., 03, 1860.

⑨ *The New York Herald*, 'The Italian War of Independence - Aid for Garibaldi', Nov., 23, 1860. アンダーソンのからの手紙が引用された新聞記事である。

⑩ *The New York Herald*, 'The Million Muskets Subscriptions', Nov., 28, 1859.

⑪ 例えば、*The New York herald*, 'Letter from Mr. Minelli - Subscriptions for Garibaldi', Sep., 11, 1860 では、新たにメカニック・バンクの頭取が寄付者芳名帳を委託されている。

⑫ *The New York Herald*, 'Garibaldi Fund - Committee of The Fraternity of All Nations', Jul., 22, 1860.

⑬ デイヴィット・ジャフィー「都市をまなざすーブロードウェイと一九世紀ニューヨークにおける視覚の文化」、遠藤泰生編『近代アメリカの公共圏と市民　デモクラシーの政治文化』東京大学出版、二〇一七年、三〇九－三四二頁。

⑭ ASN, Ministero degli Affari Esteri 1734–1875, busta 2415, Società Italiana.

⑮ ASMn, *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 9, 13, Catania: Italiani all'Estero, Avezzana Giuseppe, cc. 500–513.

⑯ ASMn, *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 9, 13, Catania: Italiani all'Estero, Avezzana Giuseppe, cc. 500–513.

⑰ *The New York Tribune*, 'Academy of Music - Garibaldi Fund', Jul., 11, 1860.

⑱ Marraro, 'Documenti Italiani', pp. 34–35.

⑲ *The New York Tribune*, 'Academy of Music - Garibaldi Fund', Jul., 11, 1860.

⑳ 田中きく代「祝祭空間と一九世紀型パレードに見る政治文化―アメリカ合衆国史における研究動向と課題」、『関西学院史学』三七号、二〇一〇年、七五－七六頁。

㉑ 田中きく代「アメリカ合衆国におけるフォーティーエイターズ研究」八三－一〇三頁。

㉒ ASMn, *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 9, 13, Catania: Italiani all'Estero, Avezzana Giuseppe, cc. 500–513.

㉓ ASMn, *Carte Giuseppe Finzi*, n. 36, b. 9, 13, Catania: Italiani all'Estero, Avezzana Giuseppe, cc. 500–513.

㉔ *The New York Herald*, 'German Demonstration in Aid of the Garibaldi Fund - Oration, Music and Gymnastic Exercises', Aug., 31, 1860.

㉕ *The New York Herald*, 'The Million Muskets Subscriptions', Dec., 5, 1859.

㉖ Marraro, *American Opinion*, pp. 285–290.

㉗ *The New York Herald*, 'German Demonstration in Aid of the Garibaldi Fund - Oration, Music and Gymnastic Exercises', Aug., 31, 1860.

㉘ 田中きく代「アメリカ合衆国におけるフォーティーエイターズ研究」八三－一〇三頁。

㉙ *The New York Herald*, 'The News', Jul., 21, 1860.

㉚ *The New York Herald*, 'Garibaldi Fund - Committee of the Fraternity of All Nations', Jul., 22, 1860.

㉛ Riall, *Garibaldi*, pp. 106–115.

㉜ ニューヨークの下船者データによると、一八四七年－一八六〇年間でアイルランド人は計一一〇万七〇三四人、ドイツ系住民は計九七万九五七五人下船している。詳しくは Ernst, *Immigrant Life*, p. 188.

㉝ ニューヨークでの亡命者、移民の生活については Ernst, *Immigrant Life* を参考にした。民族意識と団体については第十一章を参照。

㉞ *The New York Times*, 'A Million of Muskets for Garibaldi Meeting of the Italians', Nov., 09, 1859.「イタリア協会」は発足時の会議で、四つの決議を定めた。そのうち、三か条目はニューヨークのイタリア系に対する支援を要請するというものであったが、四か条目では参加を望むいかなる人々に対しても協力を要請することが定められている。

㉟ Marraro, 'Documenti Italiani', p. 38.

㊱ *The Cleveland Morning Leader*, 'Aid to Garibaldi', Sep., 5, 1860.

㊲ *The New York Herald*, 'German Demonstration in Aid of the Garibaldi Fund - Oration, Music and Gymnastic Exercises', Aug., 31, 1860.

おわりに

本稿では、ニューヨークで展開したガリバルディ支援運動を、「イタリア協会」の実地活動から検討した。合衆国の人々が亡命者、外交官、新聞社の特派員を通じてイタリア半島の出来事を認識し、思想的共感を示していたことは先行研究で指摘されてきたとおりである。新聞記事や論考を通じての思想的なアピールが、大きな影響力をもっていたことは間違いない。このような先行研究に対し、本稿では亡命行為を、亡命者間で交わされた思想の交換といった知的経験としてだけでなく、日常的実践としてとらえなおすことを目指した。その際、本稿で使用した「ジュゼッペ・フィンツィ関連文書」は、今まで亡命者の著作をもとに行われた、知的活動としての亡命研究を相対化するために有益な史料群であったこ

とが諒解されよう。つまり、亡命者の残した著作は、いわば亡命者の「理想」を読み取ることができる史料であるのに対して、本稿で使用した史料は、亡命者が亡命先で活動する際に直面した、「現実」を浮かび上がらせる史料であった。

「イタリア協会」代表アヴェッツァーナは、ニューヨークのもつ、自由に対する賛同の素地を察知し、ガリバルディへの寄付募集活動に、イタリア系以外の人々が参加することを目指していた。そのような背景のもと、「イタリア協会」は以下のような実地活動を行った。まず「イタリア協会」は、寄付活動を周知させることを目指した。新聞記事の発行、寄付者芳名帳の委託によって市井の人々がガリバルディ支援を認識したことは想像に難くない。また、「マスケット銃基金」から寄付募集のさらなる展開を要請され、「イタリア協会」は文化興行も実施した。加えて、複数の民族で構成される「友愛委員会」との協働は、民族の垣根を越えた寄付拡大を意図したものであった。さらに、「友愛委員会」との協力関係は、「イタリア協会」側からの一方的な要請によるものではなく、「友愛委員会」側にも利益がある互酬性をもっていた。このように、イタリア半島を越えた視座をもつことで、ニューヨークでのガリバルディ支援に、自由の連帯という側面を見出すことができた。

最後に、本稿では語れなかった重要な論点についても補足したい。それは、合衆国南部奴隷州でのガリバルディ支援についてである。本稿では、ニューヨークに地域を限定して論を展開したが、南部主要都市であるニューオーリンズにおいても、同様にイタリア系住民による寄付募集活動が展開されていた。本稿冒頭で示した【図】を参照すると、ニューオーリンズの寄付金が、合衆国の中ではニューヨークに次ぐ寄付金を誇っていることに気付く。この点について、フィオレンティーノは、ガリバルディ支援活動を、北部都市のみで展開する自由主義の動きとして評価し、奴隷制を支持するニューオーリンズで展開したガリバルディ支援活動は、イタリア系亡命者の多さを要因とするイレギュラーな例として扱っている[①]。しかし、ニューオーリンズではベルナルド・アヴェーニョという人物主導の下、ガリバルディへの寄付募集活動が展開されていた。主体はイタリア系住民であるが、「ジュゼッペ・フィンツィ関連文書」を調査した結果、イタリア系以外

のニューオーリンズ住民が、ガリバルディへの寄付に参加していることが見てとれた。イタリア系以外の南部奴隷州住民が、ガリバルディ支援に参加したという事実は、ガリバルディ支援を反奴隷制にのみ結び付ける一面的な理解の再考を要するが、この分析は別稿を期したい。

① Fiorentino, *Gli Stati Uniti*, pp. 144.

【付記】本稿で用いたナポリ国立文書館の史料は、平成三十年度（公財）京都大学教育研究振興財団の在外研究助成による研究成果の一部である。

（京都大学大学院人間・環境学研究科博士後期課程）

Aid for the Garibaldi Movement in New York: Practices of Italian Exiles and Their Linkages

by

HAYASHI Takahiro

Among the multiple aspects of the Risorgimento, little is known about its transnational character. Tracing the path of the subscription movement for Giuseppe Garibaldi by Italian exiles in New York during 1859–1860, this study sheds more light on these events from a circum-Atlantic perspective. In the United States, many politicians, merchants, and religious leaders observed the politic trends in Italy according to their self-interest; namely, to the Americans, the upheaval across the ocean was seen at the same time as an important affair in their own history.

During the period in the United States when the crisis over slavery threatened the union, New York witnessed the unfolding of political activities by the Italian exiles. As regards donations collected for the unification of the peninsula, the subscriptions for Giuseppe Garibaldi, whose global fame as a champion of liberty had already become unshakable, had grown into a large sum.

In his latest work on the comparative history of the two countries, Daniele Fiorentino has emphasized that in a broad sense the liberty advocated in

Garibaldi's expedition was linked with Abolitionism in the North. Historians have consistently supported this view and by analyzing the ideology of the Italian exiles and contemporary American intellectuals have characterized Garibaldi's campaign as within the broad movement for liberty in the 19th century.

The scholarship has certainly paid attention to the substance of the movement, but Fiorentino and his associates have focused mainly on the history of thought in this era and less on the concrete efforts of those who actively participated in collecting subscriptions and donations. To put it another way, it is still unclear who participated in this endeavor and how Italian exiles collected funds. In this sense, addressing the roles and activities implemented by *Società Italiana* (Italian Society) in creating a fund to raise money for Garibaldi, turns the spotlight on unexplored aspects of the campaign.

This paper reveals two strategies of the *Società Italiana*: publicity and cooperation. First, by investigating the advertisements purchased by the *Società Italiana* in major newspapers in New York, this study clarifies the publicity strategy and the specific ways they raised funds in the U.S. The fund regularly issued a list of contributors and the amount of each donation to demonstrate to the people of the city how the project was progressing. Furthermore, the *Società Italiana* held various charity shows such as Operas performed by Italian singers and exhibitions of gymnastics by Germans were also a significant part of their support. These performances were great successes, collecting large sums of money for the cause.

Second, the cooperation between Italian exiles and people of other ethnic groups was of crucial importance. The amount of aid offered by German exiles and settled residents to the fund was remarkable: they established a temporary committee to appeal for funds and requested those of German descent in other American cities to supply the Italians with funds. German exiles were convinced that with their assistance the Italian cause would be more easily accomplished and that the wave of revolution would reach their *Vaterland*. The movement to support Garibaldi was not confined to his compatriots, but rather involved large numbers of the inhabitants of New York regardless of their national origin.

Key Words; Risorgimento, Transnational, Garibaldi, Italian Immigrants, Exile